

Gundam Build Divers  
**GAWC**  
World Challenge  
GIMM & BALL'S

ホリボルトボール  
ジムとボールの世界に挑戦!

Episode  
**3**



Gundam Build Divers  
**GAWC**  
World Challenge  
GIMM & BALL'S

Episode  
**3-A**  
SPECIAL MATCHUP

VS

ガンダムストームアングラー  
ホリボルトボール  
ウイングガンダムゼロシフター

GUNDAM BUILD DIVERS  
GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

**ジムとボールは変装し  
ガンプラ女学園に潜入する!!**

「ガンブラ女子校?」  
ボールは、180mmキャノンに換わる、ポリポッドボールの新しいメインウェポンをあれこれ試作していた手を忘れ聞き返した。ジムの自宅の最上階にあるガンブラ・アトリエには、怒めいっばいからさんと陽が差し込んでいる。

「なに聞いてたんだよ、女子校じゃねえって——」  
トイレで洗った手をジェットタオルで乾かす間も惜しみ、びちゃびちゃのまま慌てて戻ってきたジムは、飛沫撒き散らしながら訂正した。  
「ガンブラ女学園!」  
というものがGBNにはあるらしい、ジムが、トイレットペーパーを補充しようとして現れたお手伝いのミス・トレイシーから入手した情報によると。そして彼女は、残念そうにつけ加えた。

「若い頃、そんな女学園があると聞いて知っておりましたら、わたしもガンブラづくりについて大いに学んで、ジムお坊ちゃまと一緒にGBNでガンブラバトルをエンジョイ出来ましたのに」  
女学園と銘打ってはいるものの、正体はどうやら、ガンブラづくりがあまり得意ではない女子ファンに、ガンブラの極意を伝えることを目的としたフォースらしいが、いずれにせよきつと、甘い小悪魔の蜜したたり香る、麗しくあやうい愛の巢窟に違いない、間違いない。ジムとボールは夢想した。  
それまでの時間、二人は、シモダから貰った未完成の多目的統合コンセプトウェポン・モジュラーパーツ『GHL・TBA』を、ジムが個人所有している射出成形機でリアルモデリングし、それぞれガンダムストームプリンガーとポリポッドボールのオリジナルウェポンとして完成させるべく試行錯誤していた。

「つたく、あのキュベレイ、なんだっただんだよ!」  
手も足も出せず、出ず暇も与えられず、ただポリポッドボールの180mmキャノンを潰されたボールは、胸こそ悪そうに思い出した。  
「つーか」  
そんなキュベレイの拡声スピーカーから吐き出された声を、ジムは思い返す。  
「アレに乗ってたダイバーって声、女子だったよな」

が一点に集中し——自分に注がれるのを、学園で唯一の男は、学舎内をめざしつつ心地よく感じた。

「学園長ってホントに素敵ね……」  
「寡黙でクールなところがたまらない……」  
「あの人だったら、わたしの大切な初めてをあげても、後悔しない……」  
まるでそんな声が届いて聞こえそうだった。

彼はダイバー名を『ロック』といった。どんなダイバーにも負けず、一番にガンブラづくりを愛していると自負していた、心の中では。  
そんな彼はある日——まだフォースを組む以前、GBNの中で突然眩い輝きに包まれ、謎の声に『女子にガンブラづくりの楽しさを広めて欲しい』と告げられ、黄金に輝くポリキャップを授かったという。

その頃のロックは心の中に住まう男だった。人に声をかける事に尻込みし、かけられれば怯えていた。それでも、気づけば手に握られていたゴールデン・ポリキャップを目の当たりにした瞬間、届いた声に従わねばと心がざわついた。

しかし、どうすれば女子にガンブラづくりの楽しさを広められるというのか。GBNの道端に立ち説いてみようとした。まるで訪問販売のようにフォース・ポリキャップを学びのシンボルに置いて。

はじめは生徒の数もわずかだった。しかし、もっぱら女子にガンブラづくりの楽しさを伝えようとすると希有なる学園の噂は、日ごとダイバーの間に伝播し、気づけば、知る人ぞ知るまでに広がっていた。それに伴い、ロックの鮮やかなガンブラテクニクに注がれる恭敬のまなざしも数を増し、受けた羨望はたんだんと彼の中に自信となって蓄積され、口数は少ないままながら腫の奥には燃える炎が宿るようになり、次第に己を着飾り見せることにも目覚め、いつしか彼は、女子生徒の視線にさらされる快感の虜になっていた。

そんな彼ののもとに、今日もまた、新たな子羊がやって来る。  
ひとつしかない教室、ホームルームの教壇に立ったロックは、居並ぶ女子生徒たちを静かな流し目で見回すと、

「あたらしい仲間を紹介する」  
瞬間、教室内が色めきだした。皆がわくわくと顔見合わせる。

「けど、なんか凄っげー口悪かったし……ウチの姉妹(きょうだい)より酷かったし、僕からしたらあんなの女子のうち入んないって!」  
言われてジムも、ヴィオラのヒステリーを重ねた。確かにそうかもと同意する。

「にしても、GBNにログインしてから、驚くことありまくりじゃね?」  
「ホント」ボールはうなずいた。「キュベレイの強襲もそうだったけど、いきなり閻金型マフィアにログアウト出来なくされるわ、かと思ったらゴールデン・ポリキャップのおかげで、GBNから出られるわ」

「だいたい——」と、二人は疑問を重ねた。ゴールデン・ポリキャップっていったいなんなんだ? ヨシとシモダはそいつを謎の輝きに包まれ話されたって言ってたけれど、ならあの二人はどうして託された? 輝きの正体は? それって、自分たちにゴールデン・ポリキャップのことを告げたのと同じ輝きなのか? しかも、レジェンド・ガンブラのビルダーは全部で7人、果たして残りの5人って、いったい。

——なんて、いまは考えている場合じゃない。夢にまでみた男子憧れのパラダイス、ガンダム女学園。桃源郷の中で繰り広げられているであろうキャップカフェを、なにがなんでもこの目に焼き付けなければ。

「けど、んな男子禁制の秘密の花園、どうすりゃ……?」  
ジムがくじけかけた、その時、

「諦めるなジム!」  
彼の肩に、熱くたぎるボールの手が置かれた。

「諦めればすべてはそこで終わる……けれど、諦めさえしなければ、たとえわずかだとしても、可能性という名の道は絶対に途絶えない!」  
「ボール!」

「ごきげんよう!」  
「ごきげんよう!」

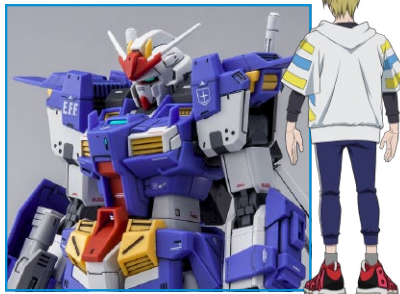
それはまるで小鳥たちのさえずり。

澄んだ小川の流れるように清く、青空に咲く太陽のように明るく、早春に実った豊かな果実のようにビチビチと爽やかな少女たちが、制服のスカートを花びらのごとくヒラヒラひるがえしながら、ニッパを、デザインナイフを、コンパウンドを、エアブラシとコンプレッサーを手に、今日も集う花園の名は『ガンブラ女学園』。その正門玄関にて華やかに戯れていたさえずりが、なにやらふと、お淑やかなささやきに変わった。彼女たちの憧れの視線

CHARACTER キャラクター紹介

ジム (ティム・パレット)

ゴールデン・ポリキャップ捜索の旅を続ける青年。今回はジム江を名乗り、ガンブラ女学園に潜入。パーティ好きとしては、まんざらでもない様子。

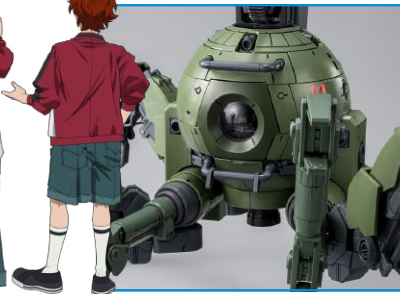


ガンダムストームプリンガー

ついに姿を現したジムの新型機で、ガンダムフェイスとトリコロールカラーが特徴。シモダとの戦いでもその実力を十分に発揮した。ボールの支援を受けることでより戦闘力が向上する……はず。

ボール (アズマ・カール・トンプソン)

今回はボール美として登場し、ジムと共にガンブラ女学園に潜入した。女性らしさを追求した結果、語尾に「ニャン」をつけてしまう間違った仕上がり。



ポリポッドボール

ボールが丁寧に仕上げた多脚型モビルポッド。謎のパイロットが操るキュベレイダムドの急襲により、頭頂部のキャノン砲を破壊されてしまった。

わたくしたち、ガンブラのこと  
右も左も表も裏も  
さっぱり存じません

アレに乗ってた  
ダイバーって声、  
女子だったよな

ロックは教室の入口を見向いて、  
「入りたまえ」  
ドアの奥に向けて告げた。

「はい！」

返事の声は二つ重なった。  
女子生徒たちが一斉に注目する。

その視線の中、入口のドアが開き、二人は現れた。

「ジム江です」

「ボル美だニヤン！」

「ビューティー&キュートな容姿に「わっ！」と教室が湧く。

「わたくしたち、ガンブラのこと、右も左も裏も表もさっぱり存じません」

「なので諸先輩おねえさま方、手取り足取り腰取り胸取り、なにとぞアツいご指導」

「よろしくお願いたします！」

最後にもう一度、二つの声が重なった。

## You spin me round 〜あつこい振りまわやわっほなっ〜

「ゲート処理素振りよーい、はじめー！」

本日の紙やすり当番の清々しい掛け声から、ガンブラ女子学園の一日は始まる。

「四〇〇、六〇〇、八〇〇番！」

「四〇〇、六〇〇、八〇〇番！」

教室に響き渡る凛とした掛け声の間を、ロック学園長は縫い、櫛を飛ばす。

「パーツを磨いていると思うな！ おのれの魂を磨いていると思え！」

「はい！」

彼のガンブラ指導は、時に真っ赤に熱した鋼のように熱く、時に小川を流れる絹のようにやさしく、

「ニツパーを握る手はこう、桃の実を枝からもぎ取るイメージ……パーツはランナーから一度に切り離すんじゃなく、ゲートに二度、三度とあてて」

あるいは、生徒の手に自身を添え、

「残ったゲート跡は、無理に切り取るうとしないで、デザインナイフで、そっと削り取る……ほーら、君の肌と同じ、こんなに綺麗に仕上がった」

「ご指導、ありがとうございます……」

「ねえねえジム江さん、ボル美さん、お二人はどうしてこの学園に？」

それは色とりどりの花々に囲まれた、噴水の湧く中庭でのお屋のひととき。まるで片手のひらに収まるほどの、お菓子箱のようなお弁当をひろげたミツバチたちが、興味津々と羽音を弾ませながら、まんまるの目を輝かせて聞いている。ジム改めジム江と、ポール改めボル美は、いまはビューティー&キュートな女子ダイバーを装っているその顔を、無警戒に覗き込んでくる女子たちの甘い香りに、鼓動ではち切れそうになる心臓を必死に押さえつけながら、

「もちろん——」

君たち学園女子とお近づきになって、レッツ・エンジョイパーリイする為、などとはおくびにも出さず「ガンブラづくりの神髄を学ぼうと思って」と、模範回答を返そうとした、その言葉を、

「わかってる、ミツバチのひとり、コンパウンド当番の女子生徒がさえぎった。」

「学園長がお目当てで、いらっしゃったんでしょ？」

「……………え？」

ジム江とボル美は、同時に発した。

「それはそうよね、なんといつてもロック様が素敵なお方だって噂は、GBNの隅々にまで響き渡っているでしょうから」

接着剤（スチロール系）当番の女子生徒が悪戯げにたずねる。

「本当はお二人とも、ガンブラになんてせんぜん興味ないんでしょ？」

「え？ あ、えっと……」

「うーん、心配しないで。ここだけの話、私たちもみんな最初は、ジム江さんやボル美さんとおなじ、ロック様が目当てっていう不埒な理由でこの学園の門を叩いたの」

いや、同じ不埒でも、自分らの目的はまた別物だ——などとはジム江もボル美も当然、口が裂けても告げない。

「けれど、学園長からたくさんのお言葉を頂戴しているうちに、いつしか私たち、心からガンブラが大好きに——」

再びミツバチたちの羽音が弾みだす。

「ロック様って魔法使いの王子様！」

「きつとジム江さんとボル美さんも、ますます虜になるわ」



「清楚な美人系でまとめたジム江と、kawaii系の派手な皆で立ちのボル美。滲入のはずが依然注目の的となつてまうのも必然であつた。」

「でも、独り占めは駄目よ」

ふと、ジム江とボル美に、彼女たちの戒めの視線が集まった。

「学園長は、みんなのものなんだから」

学園長室は、レンガ造りの洋館を思わせる三階建ての校舎の最上階にあった。窓から、ほどよく手入れされた中庭が見渡せる。噴水のある池に面したあずま屋に、女子生徒たちに囲まれる新入生徒一人の姿が見えた。

「魅力的すぎるといっても、不自由なものだな」

ロックは肩に掛かる長い巻き毛を指でもてあそびながら、誰に聞かせるともなくひとり、声にした。

独り占めしてくれてもいいのに。

確かに自分は教え子の皆からチャホヤされている。しかし、抜け駆けを許さぬ彼女らの堅い連帯意識のおかげで、学園創立以来今日まで、つねに生殺しだ。しかし——

「今度ばかりは、辛抱たまらないかもしれない……」

ロックは、見下ろしているあずま屋の中にジム江を見つめつつ、再び小さく声にした。

\*

入学初日から女学院は、ジム江とボル美を前に、夢の予感の幕を垣間開いた。夢の予感、その——

「学園長のことを想う気持ちでいっぱいになって、この胸、どんどん膨らんじゃう！」と一人の女子生徒が告白すれば、「そんなの、私の胸の方が膨らんでるに決まってるじゃない！」と、別の女子生徒が言い返す。応酬が続いた結果、

「こうなったらジム江さんとボル美さんに、どっちのバストの方がおつきく膨らんでるか、しっかり触って確かめてもらいましょーよ！」

「え？」

予期せぬ突然の事態に、ジム江とボル美の脳みそが、ポツと沸騰する。

「恥ずかしいことないわよ、女の子同士じゃない、お願い！」

「……………そ、そうよ、ね……」

「……………で、では、遠慮なく……」

両の手のひらをお腕状に構え、震えながら腕を伸ばす。あと10センチ、5センチ、1センチ。というところで遠くから、

「学園長がテニスコートでガンブラテニスの練習はじめたって！」

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

# ねえねえジム江さん、ボル美さん、 お二人はどうして この学園に？



# 学園長がテニスコートで ガンブラテニスの 練習はじめたって！



↑ガンブラバトルを申し込みに来たジム江とボル美。ボル美はどんなやつでも蹴散らす——そんなジム江の自信満々の表情と、不遜な態度のボル美であった。

「大変！ 早く見学に行かきゃ！」  
「ええ！ 爽やかなお姿で目の保養しなきゃ！」  
チャンスは走り去ってしまった。  
「……」  
夢の予感、その2——

「私、いつ転んでスカートがめくられて学園長に見られてもいいように、素敵な下着つけてるの！」

「そんなの、私の方が学園長に見られるにふさわしい下着つけてるわ！」

「ねえジム江さんボル美さん！ どっちの下着がより素敵か、その目で確かめてみて！」

二人は、今度こそはと、

「わかったわ！ なんてったって女の子同士ですものね！」

「遠慮なんてなしていくわよ！ いいわね！」

すると、またまた遠くから、

「学園長が道場でガンブラ柔道の稽古はじめたって！」

中略。

「……………」

体育館裏の倉庫の影で、ジム江とボル美は、スカートの中も気にせず大股開いてしゃがみ、声をひそめ合った。  
\*  
「って言うか、学園長の存在、ちょー邪魔なんですけど」

ジム江が言わんとしている意図はこうだ。女子生徒たちの気持ちは皆、学園長に向いてるんじや、彼女らと気持ちよくレッツ・エンジョイパリー出来そうにないっちゅーの。

「そっいえば、見たほよ？」

ボル美は、正門の方を指さし、

「あそこに飾ってあったモニュメント、あれ、ゴールデン・ポリキャップだったびよん。ってことは、この学園長、レジェンド・ガンブラのビルダー？」

「そんなのいまはどうだっていい。わたし達の邪魔する奴は、誰だろうと速攻退場させる」

「どっつするぶに？」

「考えがあるわ」

ジム江は怪しげにニヤリ笑んだ。その作戦とはこうだ。放課後の屋上にジ

ム江がロック学園長を呼び出し、二人きりになる。一方でボル美が、女子生徒らを屋上まで連れてくる。タイミングを見計らい、いきなりジム江が悲鳴を上げ、ロック学園長に乱暴されたと告げる。

「学園長セクハラ疑惑、噴出」  
「なるほどニヤン」

作戦は、早速その日の放課後、実行されるはこびとなった。

夕陽に染まる空の下の屋上、ジム江はロック学園長をまんまと呼び出した。時を見計らい、ボル美が、接着剤（瞬間）当番から精密ピンセット係まで、あらゆる女子生徒たちを屋上に誘う——彼女らがやってきた気配を確認し、ジム江が叫び声を上げようと大きく息を吸い込んだ、その時、

「呼び出してきてちょうよよかった、ジム江くん……聞いて欲しい」

向かい合っているロックが、ジム江をまっすぐに見つめ、そして、

「君に出会った瞬間、私は一目で魅入られた」

「……………え？」

「猛烈に愛おしい」

まさにパッチリのタイミング。

「……………」

「……………」

水のような声に、ジム江はロックと共に「！」と振り返った。

「言ったよね、独り占めはなはだって」

冷たく告げた女子生徒たちの傍らで、ボル美も、取り繕う術を見つけられなかった。

「……………」

「なんでわたしが、トイレの個室で……ぼっちガンブラ……」  
\*  
次の日、登校したジム江を待ち構えていたのは、弾むミツパチの羽音ではなく、冷やかに突き刺さってくる無数の針だった。華やかだった女子生徒たちが手のひらを返し浴びせるその視線は、本来はガツガツ剥き出し男子であるジム江に耐えられるものではなかった。ジム江は、授業の課題ガンブラである『MGギラ・ドーガ（レズン・シュナイダー専用機）』を手に、トイレの個室に閉じこもるしかなかった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

それでもジム江には、唯一の頼みの綱が残っている。

「頼むわよボル美……なんとかみんなを言いくるめて、早くわたしをこの独

房から解放させて！」

そんなトイレへ、授業を終えた女子生徒たちがやってきた——彼女らの会話が聞こえてくる。

「ジム江って顔キレーだけど、性根は最低だよー」 エアブラジ係の声だ。

「ロック様も、必死の色目とか使われて無理矢理言わされたんだよ、愛おしいとか、きつとー」これはうすめ液当番。

「だよニヤンだよびよん」ボル美の声である。

ジム江はギラ・ドーガのシールドパーツを、砕けるほどに握りしめた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

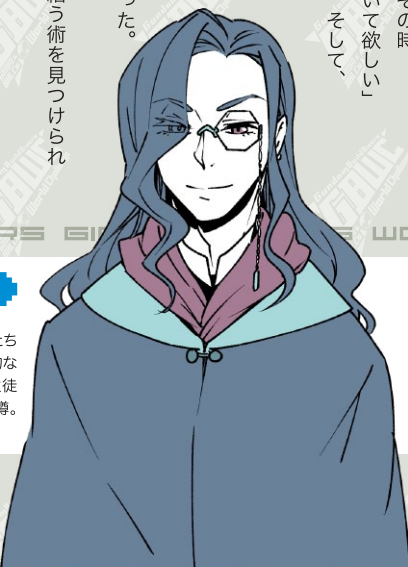


なんでわたしが、  
トイレの個室で……  
ぼっちガンブラ……

**CHARACTER**  
キャラクター紹介

**ロック学園長**

ガンブラ女学園の校長にして、女生徒たちの黄色い声援を独り占めする男。特徴的なモノクルから覗き込んでいるのは、女生徒たちが持っているガンブラ愛だという噂。スカ●ターでしょうか。



本性を暴くことができれば、虐げられているジムを解放してやれるかもしれない。

——いや、余計なことはするな。

このまま長いものに巻かれ、流されてさえいれば、きっとゴキゲンな学園生活が過ごせるに違いない。悪く思うな、お前の分までエンジョイしてやるからな……ジム江を想う気持ちは、これから始まるキャッキヤウフフの期待に、砂のように吹き飛ばされた。

放課後が訪れ、女子生徒たちの気配が消え、ジム江はようやく、「ボル美のやつ、せめて許さねえ！」

トイレの個室から飛び出したところで、マスクングテープ当番の女子生徒と正面から衝突した。「きゃっ」と相手が床に倒れる。

まだ生徒が残ってたか！「しまった」と思いつつも、咄嗟に「大丈夫だった!?」と立ち上がるのを手伝おうと手を取れば、床に強く打ちつけたらしい、その女子生徒が腕にしていた、見るからに高価そうな腕時計が、無残に割れている。

「ごめん！ 弁償する！ いくら!? 小切手でなければいまずぐここで切るから！」

思わず言ってから、そういえばここはGBNの中なんだし、そんなものアバターなら自由自在に——と思ひ改め、ふと気づけば、女子生徒がなにやら目をキラキラさせながらジム江を見つめていた。

「小切手……?」

「……え?」

「ひょっとしてジム江さんって……リアル世界じゃ超大金持ちセレブとか!?」

掴んでいた腕を離そうとしたジム江の手を、彼女の力が強く握り返した。

次の朝、ボル美はジム江と一線を引き、ひとりで学園に登校した。

「ごきげんよう」

「ごきげんよう」

爽やかなそよ風のようにかわされる心地よい挨拶の中を抜け、正門をくぐり、教室に着くと、隣の席に座るコードレスリユーター当番の彼女に開口一番、

「性悪ジム江のやつ登校してる? あ、そうだった、来てたとしても、あの子の席って教室じゃなくて、トイレの個室にあるんだっぴょん」

そして、ロックも座って見過ごしなどしなかった。

「しかしこの学園を……学園の麗しき子羊たちを迷わぬよう導けと、わたしは輝きの中、黄金のポリキャップを授かり託された」

現れた彼を、ジム江とボル美は、自信満々の表情で迎え入れる。

「なら、そいつも一緒に頂戴するとうっかし」

「だニヤン」

女子生徒たちの、或いはハラハラと、或いはワクワクと集まる視線のなか、ジム江とボル美の前に、いま、学園長が立ちはだかった。

「君たちが投げた手袋、謹んで受け取る」

## We Will Rock You

～やっぴょんやっぴょんやっぴょんやっぴょん～

ガンブラ女学園付属のスペース・グラウンドは、まるでローマ時代のコロッセウム（円形闘技場）を思わせた。ロック学園長が、学園の規模が大きくなった際、手狭になった学舎ニフォースネストを建て替えるついでに、自身にふさわしく耽美に造り直して欲しいと、某フォースネスト改装建築事務所

に依頼したのだという。ジム江とボル美はピンときた。

「いい仕事するじゃない、シモダ（エピソード2を参照）」  
シモダの事務所裏の倉庫にて謎のキュベレイに強襲され、ポリポッドボールはメインウェポンである180mmキャノンを失ってしまった。ボル美は、替わる新たなメインウェポンを、シモダから譲りうけたGHL・TBAのモジュラーパーツをベースに作り上げようと試行錯誤している。しかし、今回の口グインには間に合わなかった。故に今、コロッセウムに立っているのはジム江のガンダムストームプリンガーと、ロックの——

「あれは、MGウイングガンダムゼロベースの、カスタムガンブラだびょん……」

その勇姿に、防護スクリーンに守られた観客席で見守るボル美は、思わず息を呑んだ。まわりの女子生徒たちから、うっとり溜め息にも似た声が漏れる。

「ジム恵さんのガンブラ、目を奪われるほどに凛々しくて、圧倒されますわー」  
「ロック様の……EWバージョンの優艶でエレガントな翼を背負ったウイングゼロも、まさにコロッセウムの芸術美を背負うにふさわしい天使のような壮

「あなた、なにジム江さまのこと、デイスってるわけ?」

「………は?」

見れば、教室の上座でジム江が（教室に上座という物があるのかは知らないが）、女子生徒たちを従え、ボル美に、勝ち誇った微笑みを向けていた。

諸行無常のならばGBNも例外ではない。

「こんどはあたしが、ほっちガンブラ、っすか……」

前日までのジム江の温もりが残るトイレの個室に、今はボル美が、授業の課題ガンブラである『MGガンダムベース限定サンダーポルト版サイコザククリアーカラーバージョン』を手にこもっていた。今日中に完成させて提出しなければならぬのだが、

「あ、やば……」ふと気づいた、「トリセツないじゃん、教室に忘れてきたのかも……ガンブラの箱の中に入れて置いたと思ったんだけど」

もちろん、それはこっそり抜き取られ、隠されたに違いなかった。しかし動じることはない、当然『MGガンダムベース限定サンダーポルト版——以下、省略』のトリセツだって彼の頭の中に存在しているのだから。

記憶を辿り、精巧に組み上げる。まあそれを完成させたところで、今はなんの役にも立たないだろうが……。

いや、大いなる救いとなった。言ってもガンブラ女学園の生徒たちだ。ボル美が提出したガンブラの完成度に、ジム江はさておき、すべての女子生徒が驚愕した。

「トリセツは、確かに隠したはず……!?」

「まさか、ただでさえ部品数が多いのに、限定品だからって片っ端からクリアーツにしたおかげでランナーの文字も読めなくなってる、あの『MGガンダムベース限定——以下略』を……」

「トリセツも見ずに、組み上げたってワケ……!?」

ボル美は一躍、時の人となった。

そして今、ジム江はその財力で、ボル美はエア・ガンブラで培った特技で、全女子生徒たちの羨望のまなざしを手に入れることとなった。二人は再び手を取り合い、そして、

「これでもしあの学園長の鼻を、ガンブラバトルであかしたとしたら」

「ぎっと、もって面白い学園生活になるんだぶに」

「確かに面白いことを言う」



↑ウイングゼロのシモダの依頼により、ふたりはたの意図でさしおきして使うことにコグビッドは、スラをスラしマツエクを吹き飛ばすには十分な。

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE



あれは、MGウイングガンダムゼロベースのカスタムガンブラだびょん……

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

学園の麗しき子羊たちを迷わぬよう導けと、わたしは輝きの中、黄金のポリキャップを授かり託された





↑コロセウムを舞台に戦うウイングゼロシファアとストームブリンガー。戦いはウイングゼロシファアのペースで進み、もはやストームブリンガーは万事休す、といった状態になったのだが……。

麗さ！」

わくわくと行き交う声のなか、ボル美は表情を険しくして、

「しかも天使の翼にプラスして、メッサーツパーク8基にツインバスターライフル……」

モニターされ聞こえている観客席の声に、コクピットのジム江が、言葉を続けた。

「こっちの方はまるで、悪魔の翼に見えるわね」

「故に……」

ロックも会話に加わる。

「我が愛する最強のしもべの名は『ウイングゼロシファア』」

コクピットで不敵に笑むその表情が、コロセウムの巨大ビジョンに映し出されている。

「ウイングゼロシファア……」

ボル美は思わず繰り返した。

「そう、あらがうものすべてを業火で焼き払う、絶対の支配者」

ロックの目が薄く笑む。

「おあいにくさま」

巨大ビジョンにロックと並び映し出されているジム江の表情が、負けじとにやり笑みを浮かべた。

「支配者だろがビッグマウスだろうが、ゴールデン・ポリキャップは頂戴するわ、学園のみんなの気持ちとともにね……見かけ倒しの墮天使さん」

「見かけ倒し?」

「それほどのデカぶつ……はたして私のストームブリンガーのマニューバに、ついて来れて!」

ジム江の手が、スラスター・レバーを一気に押し込む、一瞬のタイムラグをおいて、ストームブリンガーが、対峙するウイングゼロシファアに向かってダッシュした。ライフルを構える、速射、三発、四発——その攻撃のすべてをウイングゼロシファアは、容易くかわした。

「ええっ!」ジム江とボル美は同時に思わず声にした。

女子生徒たちが黄色い声を上げる。

皆の視線の先、ウイングゼロシファアは、純白の翼を羽ばたかせ、必死にねらいを定めるストームブリンガーの攻撃を、ひらりひらりとかわし続ける。

「この翼はもろん飾りではない、片翼に高出力ジェネレーター兼ブー

### ウイングガンダムゼロシファア（暁のルシファア）

ロック学園長が制作・運用した、ウイングガンダムゼロ（EW版）をベースとしたカスタム機。高出力ジェネレーター兼ブースターとして機能するウイングバインダーに、ビーム砲を備えたメッサーツパークを8基装備。さらに、主武装であるツインバスターライフルにも銃剣が施され、圧倒的な火力と運動性を獲得している。



機体紹介  
1

↑本機における絶大な火力を担った、メッサーツパークとツインバスターライフル。

ターを二基ずつ、左右両翼で計四基」

かわしながらウイングゼロシファアは、両肩のマシキヤノンでストームブリンガーを牽制しつつ、なにやら距離をつくった。

ボル美はいぶかしげに首をかしげた——まさか、バトルを長引かせて、勝機を探している?

ふと、ロックが不敵な笑みを深くした。

「そして、もうひとつの翼も……」

次の瞬間、ウイングゼロシファアのメッサーツパークがいつせいに、爪を剥いた。

「やばっ……!」

反射的にボル美は、巨大ビジョンに映し出されているジム江に向かって、食い入るように大きく身を乗り出して叫んだ。

「バトルを長引かせるどころじゃない! 学園長は一気にカタをつけるつもりよジム江!」

同時に、8つの爪が、隠し持っていた砲口からいつせいに雷（いかずち）を放った。一面が凄まじい衝撃波をとまない巨大な火球に包まれる、観客席を守っている防護スクリーンが、その威力におののくごとくヒリヒリと震えた。

「ジム江!」

火球が失せるまで数十秒、いやそれ以上かかっただろうか。見ればメッサーツパークの凄絶なる力で大きくえぐられた地に、ストームブリンガーの姿はなかった。巨大スクリーンの映像も一時的に失われ、いまはジム江の代わりに虚しくノイズを映し出している。

「直撃……残骸すら残らなかったか」

ロックの心ふと、虚しさで心残り、そして後悔が沸きあがった。すべてがあっけなく終わり、そしてようやく冷静に想ってみれば、たとえ真剣勝負のガンブラバトルだったとはいえ、相手は一度は見初めたひと。せめて面影を残すパーツのひとつくらいは残してやるべきだったか。一抹の懺悔の心を胸にウイングゼロシファアが地に降り立とうとした——その時、いきなり地中からライフルのビームが襲いかかってきた。

「なにっ!」

咄嗟に飛翔し、再び距離を作る。

「ジム江!」

ボル美は必死に目を凝らした。視線の先の地面、その地中の奥から、ス



ヤバッ! さっきのウイングゼロシファアの攻撃の衝撃で……ジム江のアバター・ツラ・アイテムが!

それほどのデカぶつ……はたして私のストームブリンガーのマニューバに、ついて来れて!



トームプリンガーが姿を現す。

「メッサーツバークが着弾する寸前に、ライフルで地に待避壕を掘って、その中に隠れたのね……さすがだびよんジム江！」

「せっかく手に入れたエンジヨイ学園パーリライフ、簡単に手放してたまるもんですか！」

巨大スクリーンに映像が戻ってきた。ピンチを乗り越え勝ち誇ったジム江の表情が映し出される——いや、ジムの？

観客席の空気が凍りついた、そして……ちよっと……やだ……うそでしょ……全女子生徒たちが、いっせいにドン引く。

「ヤバッ！ さっきのウイングゼロルシファアの攻撃の衝撃で……ジム江のアバター・ツラ・アイテムが！」

慌ててジムに伝えようとしたボル美は——いや、ポールは、ようやく、啞然と批難と軽蔑のまなざしが、自分にも向けられていることに気づいた。

「ボル美さんまで……そのお姿……！」

ポールもまた、防護スクリーン越しに襲いかかったメッサーツバークの攻撃の衝撃に、ツラというジェンターの鎧を吹き飛ばされていた。

「えー!? あー! いやー! その……！」

「つまりお二人とも……なんちゃって女子だったってわけ!？」

「や、ち、ちがうニヤン!、これには深い理由があるんだびよん!」

「どのツラ下げでニヤンじゃびよんじゃ!」

大騒乱のなか、鳩が豆鉄砲のように最大のインパクトを食らっていたのはロックだった。なにせ彼は、いまは目前のストームプリンガーのゴキビットでうつつら青ひげ生やさんとしているガッチガチの男子に、一目惚れの気持ちを告るうとしかけたのだから。

「我が純潔の心をもてあそぶとは……ゆるすまじ!」

ウイングゼロルシファアが、天の頂をめざし一気に舞いあがった。ゼロ距離離戦を挑もうとストームプリンガーが追おうとする。しかし——

「嘘だろ! 駆動系死んでるってマジか!」

ジムはいましげに舌をうった。先ほど食らった激しい攻撃に、さすがに無傷というわけにはいかなかったらしい。咄嗟にライフルを上空に構え、連射する。

しかしそれをウイングゼロルシファアは、今度も凄まじいマニューバでかわしつつ天に駆け昇ると、冷却の終わったメッサーツバーク8基と、加え

て、左右の腰にマウントしてあるバスターライフルとを、身動きできないストームプリンガーに向けた。

「待った待った待ったあ!」

身動きとれない機体を再始動させようと懸命のジムに代わって、ポールが叫ぶ。

「あんなのぶっ放されたらストームプリンガーどころか、コロセウム丸ごと全部ぶっ飛ぶって!」

しかし、憎悪に飲まれ、取り込まれてしまったロックに、ポールの叫びは届かない。

「すべて押しつぶされてしまえ、我を切り刻んだ痛み……苦しみ……」

……ジェノサイドオ・テンフォルドバスターアアアアア!

グリッパを握るロックの右手の親指が、トリガー・スイッチを押し込もうとした——その時、突然、まばゆい輝きが彼を、彼のウイングゼロルシファアを、大きく包み込んだ。

眩しくて、なんにも見えない。けれど、目を閉じたわけではない。惹きつけられるように必死にまなこをあけて、ロックは見上げた。その輝きが差し込む方を、未来を、これは……おなじだ、黄金のポリキャップを授かった、あの時と。

声が聞こえた——もう、わかっているではないか、だから、託していいんだ、お前が得たものの、欠片とともに——

ジムには、ポールには、女子生徒たちには、その輝きは、ウイングゼロルシファアから発せられているように見えた。見上げていた機体がゆっくりと地に降り立ち、輝きが失せると、その足もとにロックは立っていた。彼は、対峙しているストームプリンガーを見据え、告げた。

「……ありがと……おかげでまた、出会うことができた」

学舎に戻るとロックは、ジムとポールに、ゴールデン・ポリキャップを差し出した。

「え? なんで?」

ジムはポールと戸惑う顔を見合わせ、

「オレら、なんかメチャクチャやったし、それに、あのままバトル続いてたら、ぜってえ負けてたし——」

「これはお礼です」ロックは穏やかに言った。

「お礼?」ポールは聞き返した。

「二人がきっかけをくれたおかげで、思い出すことができました。自分がない、この学園を生み出したのか……それは、ガンブラを愛していたから、ガンブラの素晴らしさを、伝えようと願ったから」

言うところロックは、躊躇しきまよっていたジムの手を取り、ゴールデン・ポリキャップを握らせた。

「まあ、くれるつづらんだつたら、無理には断らないけど」

「つづらうか——」

ポールは、何やら申し訳なさそうに頭を掻きながら、ジムを見た。

「僕たちなんだかいっつも、こんな感じでなんとなくゴールデン・ポリキャップ、もらってるよね」

「だな」

「いっつも?」

訪ねたロックに、ジムはうやむやと、

「まあ、いろいろとあつてさ……」

「そうですか」

ふとロックは、輝きの中で聞こえた声を思い返した——託していいんだ、お前が得たものの、欠片とともに——

「ひよっとすると、ゴールデン・ポリキャップの方が、お二人を求めているのかもしれないね」

ロックの言葉にジムは「?」となる。

「けど——と、ポールは念を押すように、

「そういえば正門のところに、ゴールデン・ポリキャップの像が飾ってあったよね……学園のシンボルなんじゃないの? そんなの本当にもらっても?」

「かまいません」

ロックは、正門の方を向いた。

「もう、迷うことはありませんから」

ジムとポールも見向けば、そこに、女子生徒たちが、ある者はニッパを手に、ある者はデザインナイフを手に集い、皆、温かい目でロックを見つめている。

そんな学園を、どこまでもひろがる青空が見下ろしている。それはまるで爽やかな春のようなページ……たったひとつ、彼女たちの正体が、実は皆、ジム江やボル美と同じく、なんちゃって女子生徒だという事実をのぞけば。



次回予告!

ジムとポールの前に、ふたたびあの美しいシルエットの機体が襲来! さらにもう一機、不穏な霧困気を纏った機体が現れる!

次回 NEXT Episode 4

ガンブラを愛していたから、ガンブラの素晴らしさを、伝えようと願ったから

Episode 3-C